

令和元年6月18日現在

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02249

研究課題名（和文）西山宗因年譜考証

研究課題名（英文）Nishiyama Soin's chronological history investigation

研究代表者

尾崎 千佳（OZAKI, Chika）

山口大学・人文学部・准教授

研究者番号：50335759

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：「西山宗因年譜考証」を完成させた。2020年度中の公刊をめざして、2019年6月現在、出版社との交渉に入っている。また、同考証の作成と併行して、「西山宗因の俳業」「宗因における出家とその意味」「宗因と伊勢続貉」ほか論文4篇を執筆・公表した。これら一連の伝記研究を通して、俳諧点業を兼業した連歌師としての宗因像を提出し、従来の連歌師宗因像に変更を迫った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究代表者が編集委員をつとめ、本研究課題の基盤となった『西山宗因全集』全6巻（八木書店）は、連歌俳諧史の空白を埋める業績として高く評価され、平成三十二年度芭蕉祭文部科学大臣賞を受賞した。本研究成果は、同全集に収録した諸資料を駆使したものであり、連歌俳諧研究にさらに寄与するとともに、近世初期の政治史や文化史の解明にも貢献する成果である。

研究成果の概要（英文）：Nishiyama Soin's chronological history investigation has been completed. The preparations to publish in fiscal year 2020 are being advanced. The 4 theses were published. These, through a series of biography study, the conventional Soin study was changed.

研究分野：日本文学

キーワード：西山宗因 連歌 俳諧 談林俳諧

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究を開始した2015年度当初、研究の対象である連歌師西山宗因(慶長十年1605 天和二年1862)にかかわる全資料を網羅集成した『西山宗因全集』(八木書店刊)は、全6巻のうち5巻分が既刊であった。申請者は、同全集編纂のかたわら、「宗因から芭蕉へ」展(公益財団法人柿衛文庫・八代市立博物館未来の森ミュージアム・公益財団法人日本書道美術館:2006年-2008年)の企画運営に携わり、展示による研究成果の社会への還元を努めるとともに、科学研究費補助金若手研究(B)「西山宗因を中心とした連歌師の行動様式と武家文化の相関性に関する研究」(2007年度-2009年度)および「書跡資料の調査分析を中心とした付合文芸の諸相に関する研究」(2010年度-2013年度)の2課題について科学研究費補助金の助成を受け、連歌師宗因の行動を武家文化のなかに定位することを試み、宗因真蹟資料の分析を進めてきた。

かかる一連の宗因研究は、2011年度ごろより、特に西鶴研究の立場から参照される機会が徐々に増え、研究者に対してより詳細な情報を提供する必要性が高まりつつあった。

2. 研究の目的

宗因は、同業の連歌師・俳諧師にとどまらず、武家・公家・茶人・富豪・僧職・神職等、幅広い階層の人々と交流した近世初期を代表する文化人のひとりであり、その伝記研究は、近世初期の歴史文化の諸相を解明することに繋がる。ところが、全集第5巻伝記・研究篇に収めた「西山宗因年譜」は、紙幅の都合等の事情により、簡潔を旨とし、もっぱら事実のみを列挙したもので、考証は一切含んでいなかった。

本研究は、「西山宗因年譜」に基づきつつ、根拠資料の一端を具体的にひもときながら、各事象の意味を深く掘りさげて考証することを目的とする。「西山宗因年譜考証」として公刊することを最終的な目標とするが、これとあわせて、考証の過程で得られた成果のうち、特に連歌俳諧史上の問題と密接に関連する重要な問題については、別途考察を深める。

3. 研究の方法

『西山宗因全集』第5巻伝記・研究篇所収「西山宗因年譜」に基づき、年譜考証の外形を整えたうえで、宗因が同座した連歌会の主催者や連衆をめぐって一次資料の調査を重ね、詳細な年譜考証を作成する。また、「西山宗因年譜考証」に収まりきらない特に大きな問題については、独立した論として口頭発表し、論文にまとめて公表する。

4. 研究成果

(1) 「西山宗因年譜考証」の完成

当初計画においては2015-2016年度に集中的に資料調査を実施する予定であったが、2015年度後半は病気療養を余儀なくされた。2017年度末に研究期間の延長を申請して認められ、主として2016-2017年度に天理大学附属天理図書館・八代市立博物館未来の森ミュージアム・京都大学附属図書館・公益財団法人柿衛文庫・東京大学史料編纂所等の機関において資料調査を実施した。2018年度には追加調査を実施するとともに、執筆に注力し、「西山宗因年譜考証」を完成させた。2020年度中の公刊をめざして、2019年6月現在、出版社との交渉に入っている。

(2) 論文「西山宗因の俳業」の概要

「西山宗因年譜考証」作成の過程において、連歌師から俳諧師への転回の時期とその理由を解明するという宗因伝記研究の課題に向きあうことになった。野間光辰「連歌師宗因」「西山宗因」(岩波書店『談林叢談』1987)が、その時期を宗因六十六歳の寛文十年(1670)二月とし、その理由を九州小倉の広寿山福聚寺における受戒に求めて以来、従来の研究は、宗因の俳諧への傾斜を出家と結びつけて理解してきた。そして、その理解の淵源は、宗因門下の論客岡西惟中の発言(『しむ団返答』『俳諧破邪顕正返答』)まで遡ることができる。惟中は、宗因の俳諧を無欲の道人のなせる業と称揚した。いっぽう、惟中による俳諧師宗因像とは正反対に、「紅毛(ランダ)流の張本」「俳諧のみだれ」の元凶として、宗因を糾弾する見方も存在する(『綾巻』)。

宗因の俳諧に対する同時代の言説が、かくのごとく、肯定と否定に大きく分かれるという事実を重く見たうえで、宗因の作品ではなく、その評点資料に注目して分析を進めた。宗因の評点資料は、連歌では、百韻14巻・五十韻1巻が現存する。いっぽう、宗因評点の俳諧巻は、百韻55巻・歌仙2巻が伝わる。宗因の点業は圧倒的に俳諧に傾いていたということが出来る。宗因が俳諧点者として活躍した時期は、寛文から延宝の約二十年間に集中しているが、寛文中期、その姿勢は、厳格から寛大に劇的に変化することがすでに指摘されている(乾裕幸「西山宗因評点考」『親和国文』1970-1973)。寛文中期の宗因は、大坂天満宮連歌所の宗匠を嫡子宗春に譲り、みずからはもっぱら回国遊行の生活を送っていた。宗因は、連歌師として諸国を渡り歩かたわら、俳諧点業にも積極的にいそんでいたのである。摂津平野庄惣年寄土橋宗静の日記によれば、寛文六年(1666)時、宗因の俳諧点料は百韻一巻につき銀二匁であったという。延宝八年(1680)閏八月刊『俳諧太平記』には、点取懐紙を持参する人々が宗因の門前に集うさまを戯画的に描写した一文も見える。

宗因が、連歌から俳諧へ活動の基軸を移した背景には、点料を頼みとする生活経済上の問題が潜んでいたと考えられるのである。

(3) 論文「宗因における出家とその意味」の概要

(2)の成果以後も、引き続き連歌師宗因における俳諧の意味を問うべく、寛文十年二月の宗因の出家の意味について、「西山宗因年譜考証」で収集した諸資料を駆使して深く考察した。

野間「西山宗因」は、宗因の出家について、寛文十年歳暮成立の宗因独吟『釈教俳諧』前書と、宗因の受戒の師、小倉の黄檗僧法雲明洞による「宗因隠士為僧序」に依拠しつつ、出家して一切を放下した宗因が、その自由な境涯を反映して積極的に俳諧に遊ぶようになったと説いた。現在なお広く知られる定説である。しかし、『釈教俳諧』前書は仏道を相対化する営みとして俳諧を位置づけた戯文であり、ここに、出家と俳諧精神とはむしろ相反する概念である。また、「宗因隠士為僧序」は、恬淡無欲な和歌連歌の達人であった宗因が、家族や主君を相次いで喪うに及んで発心し、西行に倣って仏涅槃に剃髪を遂げ、別号「西翁」を居士号としたとする。一見合理的説明に見えるものの、大筋は『西行物語』における西行出家のあらましに等しく、同序のすべてを事実と認めることはできない。

宗因が居士号とした「西翁」その他の別号について、宗因真蹟を精査したところ、従来は俳号とみなされてきたこれらの号は、宗因が、「宗因」以外の別人格にやつしていることを示すための別号であるという検証結果を得た。宗因は、連歌・俳諧という文芸の種類よりも、それをともしする相手の地位や階層に、繊細な注意を払っていたのである。

宗因出家の報は、宗因が九州から戻るより先に上方俳壇に広まり、以後、「俳諧師西翁」の人気は急激な高まりを見せる。その人気は、宗因が、当時流行の最先端であった黄檗禅に帰依したからでもあったろう。宗因は、九州各地に杖を曳きつつ、西国文化の諸相を句に詠みこみ、上方俳壇に積極的に発信した。宗因の出家は、「俳諧師西翁」像に「唐様」の体現者というさらなる箔をつける意味あいがあったと考えられる。その背景には、「西山宗因の俳業」で指摘したような、俳諧点者として活動する経済的必然性があったに違いない。

(4) 論文「宗因と伊勢 続貉」概要

連歌師宗因は、生涯に四度、伊勢に下った。野間「連歌師宗因」および尾形仍「宗因と伊勢 守武風・談林派の接点」(桜楓社『俳諧史論考』1977)は、宗因と伊勢の接点を、もっぱら、内宮長官荒木田氏富との雅交に求めているが、その当否を改めて問うべく、「西山宗因年譜考証」で収集した諸資料を駆使して深く考察した。

宗因が伊勢衆と初めて接触したのは、寛永十六年(1639)六月二十七日興行の『賦朝何連歌百韻』であった。外宮御師来田与親が、京都において、里村家・猪苗代家の連歌師を集めて興行した連歌座に、牢人時代の宗因も出席したのである。その後、万治四年(1661)正月、初めて伊勢下向した宗因は、一子宗春とともに太神宮法楽の『賦初何連詞百韻』を奉納しているが、伊勢神官と直接交流した形跡は認められない。宗因が初めて氏富と会ったのは、延宝元年、宗因六十九歳の秋であった。論文「宗因における出家とその意味」で論証したように、その三年前に小倉で黄檗禅に帰依した宗因は、「俳諧師西翁」としての活動を活発化させており、伊勢においても、連歌のみならず、「伊勢神楽」俳諧独吟百韻を賦し、太神宮に奉納している。伊勢神楽は主として外宮御師によって行われる神楽である。

延宝四年(1676)十月晦日、三度目の伊勢下向を果たした宗因は、氏富主催の西行谷連歌で宗匠をつとめ、内外宮の神官たちの連歌を取り捌いた。その完成後、連衆のひとり、外宮権禰宜度会慶彦は、「みなえぼし中にひとりや神無月」と宗因に詠みかけ、宗因は懐から頭巾を取り出しつつ「さらば頭巾をかぶる夕ぐれ」とこれに応じたという(『俳諧草庵集』)。慶彦句は烏帽子姿の神官たちのなかに禿頭の宗因が交じる光景の異様さをからかったもの、宗因は宗匠頭巾を取り出しつつ結髪のふりをしてこれに応じている。一切の断髪者を忌む神宮の禁忌をふまえた俳諧であり、連歌師宗因が実は黄檗かぶれの俳諧師でもあったという事実を、神官たちもよく承知していたのである。延宝七年七月、七十八歳の宗因が、高齢をおして最後の伊勢下向を敢行したのは、氏富の昵懇に応じて千句連歌を興行することを最大の目的としていたが、そのかたわら、杉村光治等外宮御師との俳諧にも興じている。

宗因と伊勢の関係は、従来指摘されてきた内宮長官氏富との個人的親近によるものだけではなく、外宮御師層との幅広い交流があったという事実を逸してはならない。その背景には、御師の経済力・人脈を頼みとする宗因の事情も潜んでいるだろう。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 4 件)

尾崎千佳、宗因と伊勢 続貉、ピブリア、査読無、第 152 号、2019、印刷中

尾崎千佳、宗因における出家とその意味、近世文藝、査読有、第 108 号、2018、17-36

DOI: <https://www.jstage.jst.go.jp/browse/kinseibungei>

尾崎千佳、西山宗因の俳業、ことばの魔術師西鶴 矢数俳諧再考、ひつじ書房、査読無、2016、69-98

尾崎千佳、新出宗因資料二点、ピブリア、査読無、第 143 号、2015、55 - 64

〔学会発表〕(計 1 件)

尾崎千佳、宗因における出家とその意味、平成 29 年度日本近世文学会秋季大会、2017

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。